

所属・資格 哲学科・准教授

申請者氏名 長綱 啓典

研究課題		近代ヨーロッパにおける「子どもの統治」ーフーコーの統治性論から出発してー
報告の概要	研究目的 および 研究概要	20世紀フランスの哲学者ミシェル・フーコー (Michel Foucault, 1926-1984) は、1977 - 1978年度のコレージュ・ド・フランス講義「安全・領土・人口」と1978 - 79年度のコレージュ・ド・フランス講義「生政治の誕生」において、「統治性」に関する重要な議論を展開している。フーコー自身の統治性論については、すでに多くの研究がなされている。しかし、それらはおそらくフーコーの統治性論の枠組み、つまり「国家統治」という枠組みにおいてなされている。フーコーによると、「統治」の問題は16世紀に突如として出現したが、それはまずは「自己統治」、「魂の統治・操行の統治」、そして「子どもの統治」の問題として現れ、最後に「国家統治」の問題が登場するのであるという。「自己統治」についてはエストライヒらの新ストア主義研究が、「魂の統治」についてはローズがそれぞれ議論している。しかし、「子どもの統治」についてはほぼ論じられたことはないのではないか。本研究では、まずはフーコーの統治性論およびその他のテキストに基づきながら近代ヨーロッパにおける「子どもの統治」がどのような仕方でも論じられていたのか、見直しをつける。
	研究の 結果	上記の研究目的を達成するために、本年度はまずフーコーの方法論そのものを研究した。それは具体的にはフーコーの権力論における「歴史」(histoire)の検討を意味する。フーコーによると、「歴史」とは、それとは区別される、別の歴史知の機能そのものを爆発させる「爆弾」であるという。それはどのような意味なのかという観点から研究を行った。その結果、以下のことが明らかとなった。すなわち、フーコー的歴史は、諸々の支配状態が必然的でもなく、普遍的でもなく、合理的でもない、そういう諸々の力関係を自らの基盤とすること、したがってそうした支配状態は実は脆いものであることを暴き出すのである。これによって諸々の支配状態は、それに関する私たちの自明性もろとも、いっそう脆いものとなる。そして、その結果として、ある集団と他の集団がともに戦略を巡らせつつお互いの力を衝突させ合うことができる、そういう関係が構築される。ここにおいて、可逆性の担保された権力関係が実現される。本研究によって以上のような理路を明らかにすることができた。
	研究の 考察・ 反省	当初の目的は16世紀以来のヨーロッパにおける「子どもの統治」の研究であった。しかし、まずはフーコーの哲学、とりわけその権力論そのものをより具体的に考察する必要があることが研究中に判明した。本研究ではその方法論の一端を明らかにすることができた。しかし、そうした方法を駆使して提示されるフーコー権力論の具体的な内容をより精密に分析する必要がある。権力一般に関するフーコーの考え方はすでに本研究において付随的に明らかにすることができた。そこで、次年度以降は1970年代半ばのいくつかのコレージュ・ド・フランス講義と同時期の著作『監視と処罰』を主に用いて、フーコー権力論の各論(さしあたり規律権力論)を考察したい。とりわけ、「真理の産出」と「抵抗」という観点から分析を試みたい。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所 研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>学会名：日本大学哲学会 第74回学術研究発表会 発表テーマ：「爆弾」としての歴史ーフーコー権力論における歴史の役割ー 年月日/場所：2024年12月21日(土) / 日本大学文理学部3号館2階3203教室</p>	